へ13
3012
9

赤柏平

# 遊仙奇遇錦の里巻之九

江戸　爲永春水作

## 第十七回

さて又家に室屋ろう不尾ゆく世帯を持し彼お毛へ
ほてい体ゆゑ妻ゆゑ母ゆゑ子ゆゑ衰史史芸
れまて孤しと知りつ化間を巷の蘭柔小深しける
中分にまとつまくく新まと家ね巨燈ふうとく時象の美
も結ぶの縁と縁芳ゆく眠りしおかに丘ゆそれと

へ13
3012
9
昭和九年七月九日

和ごーと美男の婦ふを乗せ〳〵の乗り場次の板
弱ふ結ふ〳〵さね志のびしい者人者のおとるーさ
おをが京の漆ふの表面ふ指ふ白ひく者も都ふ「ヒヒ
ぢやア行く指んで来ふ中刎けふ丈来ないと思ジョヨ
「その者共」「こゝ所ふ丈ふ個ふ丈ふ」
出ーと乗りまんと矢ふ乗ふ矢
けを乗ふ遠ひるへく「バイ遠ひざいません此漆ふの字
いおをさんの手でお出ふこのでぢいきんと乗ふ指い



乗てゆく指ふ文ふ初乳ふ指を乗ふ乗ふ
漆ふを押ひて中ふ内ふ入ふ中表居の角を
個人べ改〳〵助の姿ふ丈ふ元来ふ居ふ丈ふ
丈ふるふふーおをの浅猪のを丈ふ完ふ笑
ひるぐ出ー指ふ婦上さんと呼つ角ふ入ば森ふ
びつくり服を見ておを用意振白べ行ぞ丈ふ文
丈ふおどろく仏の中後ふ眠りし浅ふ動を起ていと者ふ浅者
もあゝぬ手猪の口ふ者ふ丈ふ丈ふ赤らめーが

漸くに気を強めてチャクチャクと歩くに従人どもは
ぞろぞろ後人ども出来るまゝ多くまゝ
まゝ世ん人新き一人多りまゝしてショウ
して一人ぐ出来がなら是まんめの志かゝるア今日八
強ふ形ゝしいお家の主日ぞ行程ゝとち改さんも
あてたづわて来てお呉ぐろ本ニ二ア伝なるぞ行人ト
分らかゝる程毒お文ハ一向気ふうけべ〳〵チャカ程で

ごぞいまんクト改ゝ動の例ゝ後〳〵兄上さんお紀お行人ショウ
兄上さんおをさんと三人ぐ行をして拵ぶうゝお紀と
ツベトあどけるく唯紀さまゝく改ゝ動も家八家茶同
を見ゝお文の夢ふおどろきゝが袖方寄に寝ゝ振ゝ
て息をちらせゝるまべ紀さまるのを紀ふ同をひゝ
き〳〵ヤ行程ゝてお出ぐ鬱方の通り改久〳〵アまを松をま
つどぐまで連て来て子ゝ三の百姓びふ まゝく私ハ此形ふ

居ハ〳〵で居るンとうち兄上さん京田へ出の節後人ふも
私ゞ此不人者このを云告ちやア居ごヨ「ナアニ行れ
して〻私かるをいくめのゝ子私の云ふ居このもたれ
云ちやアいけないヨ「ナニ云ハ仕ませんハそれゞゞ子
幾程もおをさんを此私を不亜のハ居こ行へ私やア
アウ深井の兄上さんふたれやくおをさんと同居
に居れふしも言いまたハもく本宅の兄上さんハ



概生ゞ思くゝもいけるハうく私やア毎日さんを毎日
いびつく兄上さんと一ふ居るのハ居ごとたれ幾程
ハアウおをさんと私と政さんと二人ぐ別ふ居る行へ
「ヲちく可哀しいるかおを云ごゞ子へ政さんとお文とおろうハ
居ふく同居ふるくおを上をかるけまど行れでモウ私ハ
おおさん達と同居ふ居るハ出来ませんヨ「ヲヤく
そそとごゝ下ても私やアハ〳〵さんと同居ふ居ふいけまゞ居

夢占
やくそを
ねたや
ねくせん
文ぐあ

ごと行ずまでも情を張りそれでも気の強いと
思入

右記ばかりなる仏の上菓子文ふうくゝ紅花白素松葉の
操素砂のくゝ玉ねぎ葉ふうで玉の中も黒くさん猿の
かゞみ丹に玉ぬ素くゝみいろ〳〵和入るお玉ガちろろまこと
海老動も勝くゝび兵人どお走ハ面世ふ中こあるまゝきせ猿
ゝ兵一面おを弘引祝〳〵和ふ余素白素風猫さハ〳〵
自然のうつくゝさハ小町姫と崎の絵めの梅も桜もすつ
くふくゝべふ中るたくゝもなし〳〵「それぢやアお中蔦弘

お事情ふゝて変くゝ変ふ中出の節出ちそふと秘さくゝよ
「ヲヤ」モウ見くゝハお作通さんの性格ふ行門でも傍ろ
くゝ毎日でもふ姫上さんの兵ガ祝くゝ出るハそれガ行のようう
私やア嫌〳〵いくゝ出ちそふもいくゝあもいくゝるのハヨアくゝ見ことさん
お前も見くゝ毎日来くゝお上るふ移くそ見でふいとおくをさんう
淋〳〵くゝくゝと泣くて私やアやく〳〵ゝくゝりまくゝ教ふんでハ
注人も遊びふ来くゝり止ゝ帝ふお出の人もあるまい移く

一体何ぼ一人で暮らすとも程一人で暮らすとて淋しい
らしく思ふに程の事の中も人が来やア仕ませんい
何ぼ家の内の事をおさんと夫婦ともに暮らす程人が
来るぞらと云ひまを「うやく暮れとさんど婦人婦
上さん故さんがあんるを何をおそでもいい
ヨ 彩やアモウ〳〵お茶さんのるを云ハるとと
申 ハ〳〵ありませんヘトあくまでおを見にして

故さんの方がおをがるを猴拉らしくいふをいうふおとる
しに世話の初しんの娘ろとそれが分ぬるの
あるまでこおをの分にいさづらしきるのあるといふ
るを見るとのとかぢ故ふ鳴ひろ暮るを
ふとと暮めるふおとぶまで故の云ぶ猴拉と
知りつくうえつくおをの肩をゆつの情合古今
和漢ふ何しまをるおん文の人相いとをがうた

生賞といふべし

国ふ[illegible]云婦人の[illegible]猿如深く悟る[illegible]と

さるものゝ生れたるに[illegible]一つゝ高の所[illegible]

ありとゞめされば[illegible]乾ゝ[illegible]古ゝ[illegible]猿如深き

[illegible]女多く[illegible]きに知りて漢の[illegible]通の后[illegible]

后の[illegible]猿如の金より[illegible]ける天子

まで[illegible]数[illegible]ふ[illegible]いとも[illegible]彼[illegible]

[illegible]日本の婦人の如くおのれを[illegible]て東方不[illegible]如

[illegible]ありとて[illegible]しといへり[illegible]人ふまで猿如を

[illegible]と[illegible]日本の猿[illegible]

[illegible]如くしば[illegible]如[illegible]公より文の[illegible]を[illegible]の

[illegible]上にも[illegible]他人の[illegible]合ふ[illegible]大和[illegible]と

[illegible]冊[illegible]

[illegible]秋も[illegible]て[illegible]人ふ[illegible]

今は夜ふかの事成のこぞきく

と探しをかがうのせ男がおて後の時女は

抜ふとしし元の時女の方へ立うろう和合時

まくく契ると紀せうれくも猴奴へ男の

仙を後立せるぞうろうこと分由思おとこ

ろ奉と時しをの人

○ 京田 猴奴茶しきく妙人の庵あり



第十八回

茶屋 東焼ふし 細末として日毎ふ後を

ろ物ハかのうぞ 猴奴の紀を高もしむというり

九重に織ものと表紙を桐ふ交る桜の花ふ生せる

今の世 往昔と左京の徳大名橋ふ意じて 秋上の武ハ

杉ふ 春の和香に咲ぶ女中方 ノウ

紅。 照家長上 秀のつのいく 根ある三ど代世日 踊りは すべと

いふてはおぼりるく我家親友傾城は始め驚きがお逆ひよ
往てもく夫なりけり同じ如ふに生まれても傾城と毋こふ
ものは格別に能ぶあるかいの〳〵文科どのはいあるる屋
名ぐ和平といふ製造ぢやゆ人自分を一番高さに業
きのでもと思ふもお新屋振ぐ紙り怪乳とうされぬ
くゝ耳ぐかいるでいあるとお互異貌のらびは始めれ
ものへても一百分時ぐ義あ一度今はきどりの秋風と



我名にうみし萩の方輝義を法ひて志と毋ふに立いぞ
こ面いノゥちてこあい女子ども往古津のく赤猪の白女
といふうか立女子作の雲せものの出身さ人屋ふ毋ふらも
あまぞ黒紋様とてい中やられぬ情の屋 下アやん
ト清気に作る美ち夫義を い方ふぶとる お義の仮妹よ
雲に婦のお義ふ白ひ「妹さん今お清あで作ノく義る
ようふ何ぐぞぞいまん待人 ヘヨヤ 私ま今まで

ちがうあるショ〳〵ヨヤ〳〵そうまこだやァ彩やァ粧のる紅くるい
ちんでおざいますとそしてアウ作の蓋生の四角とん
何のくらてございます子〳〵私も赤くろとん赤くるいが
禁裏さまうえさまのるすごショ〳〵ヨヤ〳〵アアむろーん
禁裏さまも女弁冥ふお出ちゃかこのう彩人ホンニあの
御冠ぢやアるいがぬきんごとろてサ〳〵ヨヤ
何がい〳〵アウ清盛さんの粧る能見形が赤人ようう



女弁座の方ガ置とおひさそふで冥作のち粧とりふ女を
とふ〳〵ごーて家をたーらくお客でゆいまさそ〳〵
おろう作〳〵ぬんでお来ごと能さんが私ふ嘘〳〵きーさ
ひとゆきてお家ふ公の中ふ合点のゆるね清盛の彩状
冥ふ上下の角ごそるーと世の清ふいべとく兵の粧ふ
あーんーそそぐつぬ縁の彩女弁を角結るつくまと
がまーく国女弁とふいろるる中へぞまこ彩粧るる方ふ

石垣くも見しけき樹木の根とまるこゝあの根たどゆいはる
中お勢ゞ家人集りし猿の中ゆ武人もありくまさ立洲
るゝ組お茶も清姓と高ひ矢を射しるゆ見どゆ
社長の格ゆ流しく行よゝ命伏姫しがゝせゝ
孫の情人出るゝざりしと笠おふそ石どに
まで人接をゝし侍るゝざる仏状の人ゞ
行程石の格りてらお格とゆらゆ源りしぞ

その男を出まゝしと志ゆりに石とるやまもゆ屋
に何と義人ゆゝ「アイ子 姉上さんものお母さんと
いゝ女ゝ子 孫ゆもゝりお茶さんゆ表家しでゝ義ゞく
出てゝゝば 行見ゞ姉上さんざゝ命見ゆい格ゆよく仏く
居ましたとサ 行程しゝ元でおゞざいませゝゝトゝいゝく
強るゆ屋の志を石お義ゝちゞめも完糸と義ひし
兵の雲数ハよゆ仏よゝるゆもあゝトと祝物る

お花清雅を
あらくのこころを
あやまん
終一葉
国亜画

ホンヒとも知ひるがゝ〳〵行程他人ゞ帰上さんに似ること
云てもあれや帰上さんゞ毛毛教のある兵ハ見たこと
ないとゝひまんハ〳〵行ごヨ此ハ〳〵ひまゝしゝく
かゝゝ眠くゝなるさかゝ行ぞ奏ゝせる気ゞ孫今ゆ程ゝ
きゝ砂でも買ゝ〳〵お出るそして桃川〳〵語ゝ〳〵
けるのお屋敷のをゆのてお出る〳〵アイホンニ方程ぞぎ
いかゝゝけゝトホンヒ俗ホ出ゝ〳〵形ゝ表の格子

戸をゆゝ〳〵ハイチトお教ゝゆまんお座安ゝ〳〵系ゝまゝと
〳〵ハイ行ゆ方さ分でおぎいまんゝ久しゝく不慣ホ長まん
ゝゝトカるさをホに苦ゝ中教長の陸ホ公ゆて着
〳〵ヲヤ嬉ゝゝい実正ゝと思ゝゝ行ゞ移〳〵熊さん来ホ
上ゝゝお長ゝ笠のホョゝゝ〳〵歩ホ上上と云ゝゝく
連ゞ二丁目に引ゝゝ長ゝゝ長ゝゝアモウ生来て
来ゝゝ〳〵久しゝんゞョ熊さん女弁実のせりふを

つかり始めぐ古まる子へ　「ヘン遠へ行へ女郎買とトヽ一
が焼へまるりやア坊さんにまつく　チリつくざそのとき
あやアヽ衣の袖かをお師匠さんに初夏を身てめう
つふとゆつて今ゆうそれが朱しまざ　「アンサもれる
縁起のこるいたとをこびとアヤ方へか出ヨ今用意
おこまをたしらくるあざョ　「そまこ者物ちやうらい女
ら朱さんぢやア行へが則だり流めり豆を買て来やしる
ちうし黒砂糖と温飩の粉でかさめさのちやアるいち
白の砂糖でこらくさ年の豆抜スまづ左よつく
ぢ焼ぢ香ヽさ夜方の法は中がちりうね続ッイヤ
わんこうに美味うマアなくお長ッ世へ長ッでく
凡世ヽ上ぶざうまるで然さんの粉ごノウ小屋さん
よく此亜へ来ねへとお師匠さんが丸粉食て走まん
とヨ「ヲホヽ　発ぐしい れへそしてお屋へ今後ふ

いつさく〳〵　長生ヨ　ヘホイそいつハ大きく　ぎりにの
きぞんをしこ　ヘあゝ　かゝしいわく　ヘさゝ可知ア
わく今日ハ　たゞのにぎ　チット　用ムをして大せつわ
ちやぐらゑくッちやア　ゑゝ　ヘチヤ　まゝとにをきく
ゑゝ　ゑして長ゑぐらまぐ　ゑゝ　ヘさく　こまくゝ
ゑゝ　云のハ　ゑゝ　ゑの一件ぐゝ　ゑゝ　ゑゝくハ　ゑゝ
わく　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ

ゑゝ　ヘゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　と　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ヘゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ヘゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ

来年ーざが子何とアアおい兼もおしー兼年地をさてて
かついそふふ まかい気遠ひの様ふるつく居る清
様さんの公招を可笑ごつく書る様あいお来まい
う子陸ら悔らしい人ぢやアるいとらふが子ヱヤく
るふ いい 何ぬお云らと そつく様ふもたりるい私を清雅
さんが嬲るくお云のるすく久 ヱナアニ何様して嬲る
とと 不ろ云 実ふ気ぬ ん気ぬのんで居るのサ ヱヤ

そそとざつても今ぢやア清雅さんいお様さんとりい
うくくの 美羅のと 和合してお生ぢやう るいうく ヱナニサ
それといふもお前のるので様くと気と揺まして
居るさるうう 表ろも 私がさくめてお様さんとマア
うぶ 高ら お前の名代にうらんて垂さのサまふ
ぬいてまさ 恥しがあるう 何平笑ふけてお長
る世へお様さんと呼獲も 魚がお前よ 似て居る

ぢりゝ心ゑの由者る女の怪でるくッて者ぬる和
ゐとゝる濃サる今ふ子ゝ日く咲ゝ物ゝ其の
お柿さんの心ふ由発じて一毒比熊が奥を、ゝく
お呉る廿人トまゝく子細を拍滑る主熊八次の巻
を親く知るべし

赤松平

怪怪奇遇物の異巻の九了